



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

## 探究授業「英語特講」の実践： 高校生の英語による研究活動のあり方

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 光田, 怜太郎, 小俣, 岳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/152375">http://hdl.handle.net/2309/152375</a>

## 探究授業「英語特講」の実践

— 高校生の英語による研究活動のあり方 —

A Progress Report on “Special Issues in English”

— How to design syllabus with research activities in English —

英語科 光田 怜太郎

英語科 小 俣 岳

### <要旨>

本稿では、2年次探究活動の一講座である「英語特講」のねらいと実践の記録を詳述している。2019年度で3年目となるが、毎年新たな生徒が、新たな視点を加えながら教師とともに講座を作り上げている点に特徴がある。そして、本校生徒にとっての探究活動の目標を達成するだけでなく、「英語特講」独自の目標も掲げ、高校卒業後も役立つ学術的な知識（英語そのものに関する研究内容）、技能（学術的な研究手法等）を生徒が身に付けられるようシラバスを設計し、実践している。

<キーワード> 探究活動 評価 シラバスデザイン ルーブリック 知識 英語口頭発表 英語論文

### 0. 本稿について

本稿は、SSHを受けている本校が1・2学年次に実施している探究授業のうち2学年での選択講座「英語特講」について、その実践を報告するものである。2019年度の講座担当は、英語科の光田と小俣である。第1・2章では「英語特講」の授業設計を中心にその概要を述べ、第3・4章では「英語特講」の活動を通じた生徒の変容について記した。第5章では課題と今後の展望をまとめた。第1・2章は光田が、第3・4章は小俣が、第5章は光田・小俣が協同で執筆した。

た研究テーマに基づいて、自分の所属するグループを決める。2019年度における探究グループを表1に示す。

A	平和構築・合意形成・ 歴史・地理	G	教育学・体育
		H	芸術・表現
B	政治・経済	I	数学・情報
C	アジアの中の日本	J	物理
D	英語特講	K	化学・宇宙人文学
E	心理学	L	生物
F	文学・生活科学	M	地学

表1 2年次探究授業で展開されている講座（2019年度）

### 1. 「英語特講」設置の背景

#### 1. 1. 学校設定科目「SSH探究」について

本校において学校設定科目「SSH探究」（以降本稿では「探究授業」と記す。）は、その名の通り本校SSH事業の一環として、生徒の探究する能力の育成を主眼とし、2016年に2年生の授業として始まり、2017年にはそれに加え1年生の授業も開始された。1年次には探究の手法を学び、2年次には各生徒が設定したテーマに基づき探究を進める。それぞれ月に一度土曜日に4時間連続の授業である、全員が履修する1単位の科目である。なお、3年次には「発展SSH探究」1単位が選択科目として設置されており、2年次で行なった探究をさらに発展させることを希望する生徒が選択をする。

「英語特講」は表1にある通り、2年次に選択するグループのうちの1つである。

#### 1. 2. 「英語特講」の構想から初年度開講までの流れ

##### 1. 2. 1. 「英語特講」設置の経緯

「英語特講」は、2年次の探究授業が始まって2年目、すなわち2017年度に設置された。設置された際の構想としては、「英語でディスカッションをする」というイメージがあった。SSH事業でも英語の能力の開発が求められている。このグループの最初の構想自体は英語科の教員によるものではないが、これをどう運営するかという段で英語科に委ねられるようになった。

2年次の探究授業では、各生徒が1年次のうちに定め

### 1. 2. 2. 活動中に使用する言語

2016年度当時研究部に属し2学年担任だった筆者と1学年担任だった教員1名とが中心になって翌年度から始まる「英語特講」に向けて構想を練った。そもそもディスカッションをすること自体が目的という探究活動が成り立つのか、という疑問があった。英語を使うことは目的ではなく手段である。教科としての英語なら、英語使用の技術を磨き、コミュニケーション能力の向上を狙うことが目標なのであるが、英語科として行う学習活動と英語を用いた探究活動が同じ内容になりうるのか。

探究活動であるなら、当然のことながら探究する対象がある。英語を用いた探究活動の場合、「英語で」探究するのか「英語を」探究するのか、ということが議論になった。

探究活動は高度な知的活動である。それまで持っていた知識を活用しながら、自分の興味ある話題について思考を重ね、仮説を立て検証をしていく。その際に用いる言語は何か。それは母語であろう。日本生まれの日本育ちで、第一言語が日本語であるなら、思考も日本語である。ならば、この高度な知的活動は母語、すなわち英語でなく日本語で行われなければ難しいのではないか。外国語を用いた思考が母語よりも深まることは考えにくい。単純に、ある人の持っている外国語の語彙の数が母語の語彙の数を超えていることは極めて考えにくい。したがって、我々は探究活動に取り組む際に用いる言語は母語、本校の環境では日本語にすることに決めた。すなわち、探究の授業で用いる言語は日本語なのである。英語でディスカッションをしたところで、思考が極めて浅くなる。英語の授業ならそれでよい。しかし、探究活動としては生徒の知的レベルにまったく見合わない。

その結果、当初の「英語でディスカッションをする」というイメージの「英語で」という部分がなくなったが、「ディスカッションをする」という部分は継承されている。これは、「英語特講」を受講している生徒が、それぞれ発表・質問・議論を日本語を用いて生徒間で行うということである。教員や生徒同士の言語コミュニケーションは母語で、探究活動において、発想を説明し、計画を伝え、質問をし、提案することを、母語の障壁なく自由に行わせるようにした。

その一方で最終的な成果物、すなわち論文は英語で書くことを課している。母語で研究した内容を外国語でまとめることは、探究活動の思考部分に制約を課すものではない。そして外国語でまとめるということは将来的に自らの知的活動を広く世界に発信していく能力の育成に

なるからである。その他、「英語特講」で英語を用いることが求められるのは後述の中間口頭発表の一部および最終発表である。

### 1. 2. 3. 探究の対象

「英語で」探究するのではなく、「英語を」探究するなら、具体的に何を探究するのか。英語について学ぶというと、英文学、英語学、英語教育などの分野が思い浮かぶ。生徒の関心に合わせ、探究の仕方を指導することになった。しかし、生徒によってはこれらの分野に興味を持つのではなく、前の項で述べたような英語を用いた活動に興味を持ち、本講座を選択する生徒もいるだろう。そのような生徒も可能な限り対応することを、当初から方針として決めていた。逆に、これらの分野について成果物を含めて最初から最後まで母語で探究を行いたいのであれば、他の講座を取れば良いのである。例えば、英語教育の政策を日本語で探究するのであれば表1における「英語特講」でなく「教育学・体育」を選択しても良い。

なお、「英語特講」開設の前年度に、探究内容について、「英語特講」の前身といえるものがあった。それは筆者も担当者の一人として携わった2016年度の探究講座「生物」である。生物を選択したうち数人の生徒に、言語についての研究をヒトという種がもつ特性という観点で言語についての探究を行うよう指導したのである。言語研究を生物の枠組みで行うことはおかしいのではないかと、思う人も多いと思うが、生物言語学という学問は存在する。生物言語学は、生成文法の仮定するヒトの言語能力を、神経学や生物学の見地から明らかにする高度に抽象的な学問である。当然、生物言語学そのものを高校生が扱うわけではないのだが、ここで生徒の幼い弟の言語獲得を観察する探究が行われ、ヒトの観察という点において、生物の枠組みで行うことは理解されやすかったと思う。言語研究を行ったという点で、この「生物」講座の一部が「英語特講」のプロトタイプになったといえ、これのおかげで「英語特講」は初年度からスムーズに探究指導が展開できたのである。

### 1. 2. 4. 「英語特講」の開講

結局のところ「英語特講」開始時点において、その目指すところは、他講座同様に探究活動を展開し、発表や成果物を英語で行うというところに落ち着いた。探究内容は「英語で」行うのか、「英語を」行うのかという問いについて、どちらでもあるといえる、という答えが妥当である。探究活動について授業中に行うディスカッションや相談は日本語、発表などは英語を用いる。探究の対

象は、もっぱら英語を含めた文学や言語、言語教育に関することがメインであるが、そうでない生徒も受け入れる。しかし、理系の内容などは現状のところ内容の指導が難しい。つまり、理系の内容で探究をし、英語での発表を望む生徒には対応できないが、それは現状としてやむを得ないので、まずはできるところから始めようということで、本講座「英語特講」は2017年度より開講された。

## 2. 「英語特講」の実践

### 2. 1. 授業形態

本章では今までの「英語特講」の実践（その前身である「生物」内言語コースを一部含む）について報告する。

2017年度に本講座が開講して以来、例年10人弱程度の生徒が受講している。これは、少人数対応で指導でき恵まれた環境で指導できることを意味する。講座説明の時点で英語で口頭発表や論文提出を課すことを説明しており、高校生でまとまった量の英語を書いたり口頭で高度な内容を説明したりすることに挑戦しようという生徒の数は相当少ない。この意味で、まだ「英語特講」で受講制限をしたことはないが、この講座を受講することに決めたというのはそれ自身がセレクションを通過したようなものであるといえるのではないだろうか。この講座は、少人数で担当教員も2～3人つき、また後述する留学生との質疑応答ができたり助言が得られたりするという点で、相当に恵まれているといえる。これは「英語特講」が実験的教育研究を行う場であり、英語で探究活動を行うとはどういうことだろうか、ということを考えるのに必要なコストだと考えていただきたい。

少人数であるという特徴を生かして、本講座では個人の探究活動でありながら、自分の研究について他のメンバーに発表したり、質問や提案をしたりする。これは、1.2.2で述べたように自由に思考し意思疎通するため、日本語で行う。写真1のように机をお互いに向かい合わせるよう並べて、ゼミ形式のようにそれぞれの研究についてディスカッションする場になっている。



写真1 授業の様子（2017年度）

### 2. 2. 生徒の探究テーマ

各年度の各生徒の探究テーマについて取り上げる。それぞれのテーマの後に、あてはまる分野を適宜ラベリングした。ただし、とりわけ出現頻度の高い「第二言語習得」は【SLA】と表記した。

2016年度における、「生物」講座のうち、言語をテーマにしたものは次のとおりである。

- ・ 幼児期における第一言語の獲得段階－弟の4歳次の理解と習得－【言語獲得】
- ・ 「ヤバい」の意味拡張の考察【意味論】

2017年度のテーマは次のとおりである。

- ・ What is native like English? 【SLA】
- ・ Why is it difficult for Japanese to catch English? 【SLA】
- ・ The Way to improve Japanese People's pronunciation 【SLA】
- ・ Bon Voyage To The Movie 【SLA】
- ・ The research on the better choice of seeing foreign movies 【SLA】
- ・ Understandable News written in English for Japanese high school students 【SLA】
- ・ The evolution of loanwords in the Japanese language 【語彙論】
- ・ The differences between the synonyms of American English and British English 【語彙論】
- ・ What is an attractive English speech? 【心理学】
- ・ Leadership and Introversion 【心理学】

2018年度のテーマは次のとおりである。

- ・ Why Japanese people apologize very often? 【文化論】
- ・ Behind the Global Popularity of K-POP 【文化論】
- ・ Efficient Erasers ~ How Erasers Work ~ 【物理】
- ・ Comparing the British English Version and the Japanese Version of "Harry Potter and the Philosopher's Stone" 【翻訳】
- ・ A good translation for novels 【翻訳】
- ・ The Possibility of Losing Inflections in German 【形態論】

2019年度のテーマは次のとおりである。本稿執筆中においてこの探究活動は継続中である。

- ・ How to Learn English Efficiently 【SLA】

- ・ Languages And Dialects 【社会言語学】
- ・ British English and Social Classes 【社会言語学】
- ・ Why Is There So Much Difference in terms of Frequency of Letters? 【英語史】
- ・ DENTAL HEALTH - through my exchange year in America 【文化論】
- ・ Examining the differences between Japanese and American thoughts from movies 【文化論】
- ・ The difference between Japanese and English expressions 【意味論】
- ・ The Impact of Brexit on the Education in the EU 【政治経済】

テーマのタイトルから研究内容が理解しにくいものも見られるが、高校生の興味関心は、自身も苦勞しているだろう外国語学習、すなわち第二言語獲得に関するものも多く見られる。また、【意味論】や【語彙論】、【翻訳】など、言葉そのものや日英の言語の差について興味関心を抱いているテーマも多い。その一方で、【文化論】、【心理学】などと分類されたものは研究対象は言語ではない。自身の留学経験をもとにリーダーシップや歯に対する意識をもったり、外国のポップ・ミュージックについて研究したいという生徒もいたりする。Brexitに伴う外国人留学生の大学学費の値上げという相当に具体的なテーマを設定する生徒もいる。異彩を放っているのは2018年度の消しゴムについての研究である。これは【物理】の知識が必要となる。結果として、物理の高度な知識をそれほど使うことなく研究は終わったが、理系をはじめとする専門性が高度に必要な探究活動を英語でどう指導するかは、今後の課題である。それでも、多くは外国語教育や言語・文化など英語教員が専門としている可能性が高い分野の選択が多く、だいたいにおいて探究活動として指導できる範囲の選択が多い。

## 2. 3. 「英語特講」の1年間の流れ

### 2. 3. 1. 年間スケジュール

探究活動は原則毎月土曜日に行われるが、2019年度の実際の日には、4月20日、5月25日、6月22日、7月13日、9月28日、10月5日、11月30日、1月25日、3月16日の9日間である。日程の間隔にも留意してほしい。

### 2. 3. 2. 入門的知識の指導

1学期の探究授業は、毎月ほぼ30日の間隔で実施される。標準的な探究活動の流れとして、生徒はテーマを1年次のうちに決めておくよう言われる。しかし、言語や言語

教育などの知識がない状態で立てたテーマは、本を読めばすぐに解決できるものであったり、必要な知識や視点が欠けていたりする。例えば、本校との交流が深いタイに比べて日本の英語力の低さを課題意識としてあげた生徒は、比較対象の国で英語が公用語などとして用いられているかなどの要因を考慮していなかった。漠然と日本人は英語ができないというイメージで語っていたのである。

1学期の目標は各生徒が選んだテーマの傾向に合わせて、その分野の最低限の知識を講義形式で与え、より適切な課題設定をすることを目指す。例年、第二言語習得、社会言語学、英語史を取り上げることが多い。紙面の都合上、詳細は割愛するが、第二言語習得については高見澤他(2004)が基礎事項を日本語で解説してあり理解しやすい。また英語の言葉そのものに興味ある生徒は英語史が参考になることもあり、入門書として適している児馬(1996)を紹介することが多い。また、方言や若者言葉、社会階級と言語の関係に興味を持つ生徒には、社会言語学の導入として次節で述べるLabov(1966)を実際に教材として授業で用いる。

### 2. 3. 3. 言語研究の手法についての指導

言語研究において、例えば「ら」抜き言葉のついでの使用実態を調査しようと思った際、経験の浅い学生は「あなたは『食べられません』と言いますか?」という安直なアンケートを取る。しかし、福島・上原(2004)が『「言いません」としか僕は言わないです」という例をあげて、母語話者の直感と言語使用の実際の間には矛盾があることを指摘するように、被験者に調査内容を意識させるような手法は適切とは言い難い。そこで、生徒に言語調査の手法として、社会言語学の祖であるラボフの有名な実験手法を学ぶため、その実験の一節を授業で取り扱う。Labov(1972)では、階級の違いが/r/の発音の有無と関係があることを示すため、3種類のデパートの店員に「靴は何階で売ってますか?」のような質問をすることで“Fourth floor.”と回答させる調査を行なった。これは、被験者である店員に自身に/r/の発音について意識させることなく、実際の言語使用を調査することができたという、極めて優れた調査方法であった。この実験の一節を英文で読むことで、英語での論文の書き方がわかること、社会言語学を知ること、そして言語調査における研究手法を学べるということが同時に期待できて、とても効率良くかつ重要なことが学べるのである。

前節および本節での知識や手法を学んだのちにテーマ設定ひいては講座選択ができれば理想的なのだが、それは高等学校の三ヶ年という短さを考えると難しいのだろう。

### 2. 3. 4. 研究進捗状況報告とディスカッション

「英語特講」の重要な特徴として、少人数のゼミ形式という点があるのだが、その利点を生かし、各人の研究について、どのようなテーマにするか、どのように調査を進めるかを、1学期中に全員が授業で報告する。

「英語特講」では他の生徒の研究についてディスカッションすることを重視する。自分の研究について定期的に報告することにより研究のペースメーカーとなる。また、自分の研究を言語化することで、自分自身で整理し、問題点を把握することができる。また、友人同士で改善点を提案することで、より良い研究のあり方を協同で考える。また、動機づけが不十分な生徒も、友人の発表を聞いて刺激を受け、目覚ましい発表をするに至った。「英語特講」ではこのディスカッションを重視しており、主体的に議論に参加することを評価の対象として付録のループリックにも明記している。特に、臆せず手をあげ尋ねる「質問力」の育成を狙う。

学問分野の入門的知識と研究手法の指導、ならびにそれぞれの生徒の研究計画の報告が主に1学期の展開であり、十分に準備できたところでよいよ夏休みに入る。1学期最後の授業では、授業中に担当教員と個人とで面接を行い、探究の方向性を確認する。それを経て本格的な個人探究が始まる。

### 2. 3. 5. 国際交流受け入れ

「英語特講」は英語による探究活動を展開しているが、国際交流活動の多い本校では、しばしば日本に外国の高校の訪問を受けることも多い。その際、「英語特講」が来校団体を受け入れることがしばしばある。一般教室に来訪するわけではないので、ゲームなどの楽しい交流よりも、学びの場としての知的な活動を展開したい。本年7月に中国北京市第二十中学の高校生が来校し、1学期の総まとめとして各生徒はそれまでの研究計画の発表を行った。その後、中国の生徒と日本人の生徒で4つのグループを作り、お互いの国の英語教育についてディスカッションを行なった。写真2は北京の高校生との交流の様子である。



写真2 北京の高校生との交流会（2019年7月）

### 2. 3. 6. 中間口頭発表

2学期に入ると10月はじめに学校説明会があり、その中でポスター発表を行う。これは、講座「アジアの中の日本」を除き全ての講座が一斉に行う。その一週間前が9月の探究授業であり、そこではもっぱらポスター発表のためのポスター作成やその他準備を行う。

「英語特講」以外の講座ではそれぞれの分野の専門家をアドバイザーとして招いて助言を受けるが、「英語特講」では東京学芸大学から留学生を1・2名程度派遣してもらい、生徒は留学生相手にポスター発表を行い質疑応答や助言を英語で受ける。写真3はその様子である。これは本校が大学の附属高校として行なっている大学との高大連携の一環であり、詳しくは光田・小太刀（2019）を参照されたい。そして、留学生に対して英語で発表し、英語でコメントを受けることは大変刺激になる。その後、全講座共通で、アドバイザーから生徒一人一人に助言を文字媒体で受けるが、留学生のコメントは当日のフレンドリーな雰囲気と異なり、たいてい厳しいものとなっているが、生徒たちは前向きに受け取り、研究の軌道修正を行う。

なお、中間発表での発表言語は留学生に対しては英語だが、本校生徒や学校説明会のために来客された方には日本語でもよいとしている。1.2.2.で述べたように探究内容自体を深く考えることも重視しているからである。

中間発表についての生徒の変容の様子は次章で改めて記す。



写真3 ポスター発表の様子（2018年度）

### 2. 3. 7. 論文提出に向けて

2.3.1に示したように本年度の場合10月5日の次が11月30日である。つまり、ここで約2ヶ月の間が空く。中間テストや学習旅行（修学旅行）などの行事が入っていることもあるが、中間発表が終わった途端、探究活動

はしばらく止まるように見える。生徒の振り返りに「発表活動後、シーズンオフだった」という表記が見られたが、言い得て妙である。実際、このスケジュールリングには検討の余地があると考えている。中間発表後、「総合的な学習の時間」で振り返りを用紙1枚に発表の振り返りを記入させていたが、通常の探究授業の形で行いたい。ディスカッションを重視する本講座にとって、協同での振り返りこそ重要なものであり、個人での振り返りだけでは不十分であると考えている。9月の探究授業も前節の通りポスター制作等に当てられるが、夏休みに何を研究したのか、じっくりと話し合いをする時間が必要である。そして11月に久しぶりに集まり、それをもって2学期の探究授業は終了である。こうした意味で、中間発表から3学期最終発表に向けての準備がしづらい状況にあるとも言える。

では、11月の授業で何をするか。まず、中間発表での助言を受けてからの今後の研究の方向性を1学期同様ディスカッション形式で共有する。

そして1月に論文を提出するので、論文の構成や参考文献の書き方を指導する。(詳細は4章で扱う。)この指導を受け、生徒は論文執筆に入る。主に冬休みを使い執筆を進め、3学期を迎える。

### 2. 3. 8. 論文提出と最終発表

「英語特講」の生徒に課される論文の分量は英文6枚と日本語要旨1枚である。1月の早い時期に最初の提出がされ、授業で内容について助言を受け、約1ヶ月の修正期間を経て最終提出をする。論文の英語はALTの力を借りながら添削をする。ゆえに、1月の授業は主に個人面接という形態になる。

3月の年度最後の探究授業では、中間発表同様、大学に留学生の派遣を依頼する。このときに講師を呼ぶのは「英語特講」独自の取り組みである。写真4のように、留学生の前でスライドを用いて英語で発表をする。また、来年度の講座をこれから決めようとしている1年生もオーディエンスとして参加するため、発表する生徒にとってはとても緊張する場面となる。発表時間は概ね10分で3分程度の質疑応答の時間がある。論文提出と最終発表を終えれば無事に1年間の探究活動を終えたことになる。(当日欠席すれば後日担当教員の前で発表をしなければならない。)生徒の達成感と解放感は相当なものである。



写真4 最終発表会の様子(2018年度)

## 2. 4. 評価

探究活動はルーブリックによる評価を行なっている。通常の教科のように5段階での評定が出るわけではない。実際のルーブリックは付録を参照されたい。粘り強く探究に取り組む姿勢などを中心に生徒の取り組みを評価する。原則として、年間を通した達成具合をみるので、1学期から3学期にかけて数値が上がっていくのが通常である。

特に2019年度より、2.3.4で述べた「質問力」を重視するようにした。英語でも日本語でも積極的に質問し、自分の意見を述べる態度を形成したい。これは性格とは別のコンピテンシーではないだろうか。授業でも素朴な疑問で構わないから積極的に発言することを促し、そのような雰囲気づくりをすることにも努めている。「こんなこと聞いたら恥ずかしい思いをするかもしれない」などのような態度を脱却しなくては、コミュニケーション能力が求められる研究活動は難しい。年間のディスカッションを通して、少人数の場で、気軽に発言できる生徒が増えてきたが、相変わらず聞いているだけの生徒もいる。どうすればこのような生徒たちが発言できるようになるかが課題である。

## 3. 中間発表の様子

### 3. 1. 概要

2.3.6でも述べたように、2019年10月5日土曜日の探究活動の時間に、本校大体育館にて中間発表を行った。事前の指示で、A1版サイズの模造紙にPowerPointで作成した「情報シート」を印刷し、全部で6枚～8枚貼り付けた。タイトルや追加情報を書き加えることで、参加者にとって情報を簡潔に、かつ確実に伝えるポスターを作成した。中間発表はこのポスターを用いたポスターセッション形式をとり、聞き手は興味関心のあるポスターの前を訪れ、話を聞き、質疑応答を行った。



写真5 発表の様子

今年度も、「英語特講」の受講生の発表は日本語、英語それぞれで行われた。今回も前回までと同様に、校外から多数の審査員や、東京学芸大学の留学生も参加し、英語で発表する機会も得ることができた。受講生からのプレゼンテーションの後には質疑応答も活発に行われており、話し手・聞き手双方が熱心にメモ取りながら対話している様子が印象的であった。英語で発表を行った者も、十分な事前準備が奏功し、プレゼンテーションそのものは大変優れていた。しかし、質疑応答では苦勞する姿が目立ち、即興的に話すことや英語でのディスカッションにこれまで以上に取り組むべきものと認識した生徒もいたようだった。

### 3. 2. 聞き手からのフィードバック

プレゼンテーションを受け、聞き手はどのような反応をしたのか。特徴的なものを2点、ここで提示する。英国のEU離脱問題と高等教育の学費について研究をしている生徒の発表に対し、留学生が以下のコメントを生徒にフィードバックしている。

[...] In the afternoon session her presentation was by far the best I have heard. Her visual aids were perfect, and the topic matter of BREXIT is both complicated and requiring a nuanced understanding of the topic. She displayed her ability to discuss a wide range of abstract topics such as politics, education, economics, and more as it related to study abroad and BREXIT. Her ability to not only discuss facts about these complex concepts, but to also meaningfully express her opinions on them emboldens her to a level of intelligence not easily displayed by her classmates.

The only area of improvement she will need to work on is eye contact and confidence. Although she was nervous, this did NOT impact her

ability to deliver an almost perfect college level presentation. [...] She has proven herself to be at a higher aptitude than her current grade level, excelling that of her classmates.

Her ability to discuss her research topic as it broadly relates to the current events of BREXIT and the fact she is aware of currently elected officials made my conversation with her all the more enjoyable. As the topic was difficult, using an outline of speech was appropriate so she did not miss any important details. [...]

(留学生のコメントより引用、下線筆者)

発表者は極めて高いレベルの発表をしていたことが分かる。そして、発表の意図や内容が正しく伝わっていたことを窺わせる、詳細なコメントであることも注目に値する。ただし、アイコンタクトの少なさについての指摘もあることから、今後改善すべき課題も見つけられたのではない。

一方で、厳しいコメントが付された発表もあった。例えば以下のようなものである。日英の両言語の対訳を研究しようとした発表についてである。

The purpose given for why they chose this topic when they were asked did not match the significance of the study stated in the conclusion. [...] They urge their audience to take a deeper look online on the translated lyrics of songs to have a genuine interest in what a given song is truly about. [...] Comparing their own direct translations to the conceptual translation provided by the official version was a good idea, but they should have included a literal translation that was not their own as the question of accuracy could become a concern to challenge the credibility of this study. Additionally, they included no information on their translation process which could result in the audience perceiving their direct translations made by themselves as weak or not credible. [...] They should change their reason for picking this topic to match the significance of the study. If they do so, the students will come across as more informed and passionate about the research. These students spoke too quietly and it was very difficult to hear them.

(留学生のコメントより引用、下線筆者)

研究手法について疑問が残る発表だったことが分か



り、研究を全体的に見直す必要があることが伝わるコメントである。こうしたコメントを生徒がどのように受け止めるのか、次節以降で実際に当該生徒の反応を見つつ、本講座で指導が至っていない部分はどのようなところにあるのか、再考する必要もあると感じた。

この他にも発表生徒一人ひとりに詳細なフィードバックが与えられたが、聞き手から様々な反応を引き出せたという点で、生徒は大いに刺激を受けた様子であった。発表の準備にあたっては、限られた時間を有効に使いながら、自分たちが何を知りたいのか改めて認識を深め、その上で何を聞き手に伝えたいのか、深く考えていた様子だった。結果的にはうまく伝わった、伝わらなかったと様々な評価を得るに至ったが、あくまで「中間」発表であり、今後の研究の進め方こそが重要となってくる。次章では本発表を受け、生徒たちがどのように課題と向き合い、最終発表に向けて行動計画を立ててゆくのか観察した。

#### 4. 探究活動における生徒の変容—中間発表を例に—

中間発表の後、2年生は学習旅行に出掛けてしまうため、期間が大きく空いてしまう。2.3.7で言及するように、11月30日土曜日の探究活動で中間発表の振り返りを行うこととなった。なお、前日の「総合的な学習の時間」で個人での振り返りはしていたものの、発表の記憶が新しいうちに振り返り希望はかなわなかった形である。

##### 4. 1. フィードバックの受け止め方

まず、生徒には聞き手からのコメント全てに目を通させた。様々な評価があることに触れ、その中から改めて自分たちの課題設定を行った。それを踏まえ、ゼミ形式で、全員でその内容を共有した。教師からのコメントも入れつつ、積極的に生徒同士でコメントできるようにした。

生徒たちは概ね、聞き手からのフィードバックを前向きに受け止めていた。不足していた調査やデータ収集について明確化できている生徒が多かった。しかし、「ここから先どのように研究を進めてゆくべきか迷う」と述べる生徒もいた。そうした生徒に対して、教師の側から別の角度で眺めてみることや、先行研究にさらにあたってみることを助言した。また、研究手法についても再度確認し、各自のリサーチクエストに答えるために必要となる手法を再度見直すよう助言した。

##### 4. 2. 最終発表に向けた行動計画

次に、生徒は3学期の探究活動に向けた行動計画を検

討し始めた。既に論文執筆を始める準備が整った生徒もいるが、大部分の生徒は主に冬休みに論文を執筆し、その内容を3学期に最終発表の形でアウトプットする予定となっている。そこで、行動計画を立てるにあたっては、これまで出来ていたこと、出来ていなかったことを改めて振り返り、仕分けするようにした。探究活動のルーブリック（本稿「付録」参照）も参考にしながら、最終的な目標に向けてどのような経路を辿るべきかという視点も入れることとした。そして、振り返りの中で、次節で論じるように論文執筆について不安を抱える生徒が多いことが分かった。

##### 4. 3. 論文執筆に向けた教師の介入

中間発表の振り返りから、生徒が感じている不安、すなわち最終成果物である論文について教師側から指導する必要があると考えた。

本校は特に理科で実験と観察に基づくレポート執筆が毎週のように課されており、生徒は書くことそのものには十分慣れていていると言える。また、英語の授業でも発表や議論の活動、書く活動も定期的に行っており、アウトプットの機会が多いと言える。しかし、探究活動における書くことの指導については手薄に感じている。1年次の探究活動ではリサーチクエストの立て方や、データ収集・分析の方法論等、研究の初歩から学べるカリキュラムが設計され、研究の実際の方法を知るという意味では大変充実していると感じている。また、それぞれの活動はルーブリックによる評価が行われ、生徒にフィードバックされる。しかし、最終成果物たる論文の具体的な執筆方法についての指導は、各担当者に委ねられている現状がある。

探究活動は、研究の手法を取る以上、アウトプットとしての論文も学術的である必要があり、学術論文そのものについての知識が必要であると感じた。

生徒にとって「学術論文」の印象を尋ねると、Introduction, Body (Research design, Data collection, Analysis), Conclusion, References という構造を持った文章のことであるといい、正しい認識はしているものの、構造の内側、つまり文章の質や使用する言語については認識が深まっていない印象であった。

そこで、筆者から学術論文 (Academic Writing) の基礎について講じることにした。(1)論文の構造、(2)文章の構成法、(3)引用の仕方と参考文献リストの作り方、以上3点について、実際の論文(過年度の「英語特講」受講生のもの、筆者の学位取得論文)を参照しながら解説

した。(1)については生徒の認識の正しさを前提に、最終成果物として提出する論文の具体的な形式やフォーマットに即して解説した。(2)については、Purdue University (2019) の解説に依拠しながら、特に言い換え・要約 (paraphrasing and summarizing) について強調した。そもそも、他者の考えや書籍の内容を引用することに対して抵抗がある生徒が多く、引用の正確な仕方についてもまだ学習していないとのことだった。

そこで、引用と剽窃 (いわゆる「コピー&ペースト」) の違いについても触れ、剽窃は決してされるべきではないことを強調した上で、引用は「悪いこと」ではないことを明確に伝えた。そして引用の仕方としては、他者の考えを自分の言葉で言い直してみることや、短く要約する練習が必要であることを伝えた。幸いコミュニケーション英語の授業では、「リテリング活動」を行っていることも多く、言い換えや要約については一定程度の練習はできているのではないかと推察される。

そして最後に、(3)について詳述した。引用の仕方に様々なスタイルがあること (APA, Harvard 等) を前提に、本文中では「著者名 (出版年)」「○○○ (著者, 出版年)」のように、他者の考えである旨明記し、巻末に参考文献リストを指定された形式で作成するよう指示した。

以上のように、個人研究を基盤とした探究活動ではあるが、生徒の活動の様子を多角的に見る中で、知識として伝えなければならない部分は確実にあり、教師側が介入する余地があることがわかった。

## 5. 結論と今後の展望

ここまで「英語特講」が何を目指し、生徒はこれまでどのように学んできたかを記した。そもそもの根本的な問題として、そして簡単に解決できないこととして、英語で探究活動をするのがごく一部の生徒なのか、ということであろう。究極的には全生徒が英語で発表できることが望ましいだろう。しかし、それは英語を指導する人的リソースの観点から不可能である。また、各講座が日本語で論文をまとめたあとにそれを英語科教員が英語に翻訳する指導をすればよいという考えをする人もいるかもしれないが、筆者らはそれには疑義を呈する。探究活動における英語とは、日本語で完成させた論文をそのまま和文英訳することではない。英語で口頭発表などのコミュニケーションをし、研究を進めながら発信の手段として常に英語を意識することが必要なのである。

本講座は、探究活動を英語で行うことに興味を持った生徒のための講座である。「英語特講」とは、高校生が英語で探究活動を行うということがどういうことなのか

を模索する教育実践の場なのである。本稿で繰り返し述べているように、研究活動そのもの、すなわち思考や、指導教員・同僚などとの相談は母語でできるのなら母語で行うべきである。一方で情報の収集や交換そして発信に英語が使えることで、アクセスできる対象が何倍にも広がるため、英語を用いて学術研究を行うことは現代では大変重要なスキルなのである。

探究活動をますます充実したものとするためにも、「書くこと」について更にこだわった指導を行うことも必要である。教師と生徒の一对一の論文執筆ではなく、組織的に行ことが理想であろう。別の論考でも触れているが (小俣, 2020)、高校生にとっても、学習活動のあらゆる側面を書くことが、これまで以上に求められていると言える。

「英語特講」における実践が、今後も生徒の充実した探究活動として展開できるよう、プログラムの改良を重ねていきたい。そしてその成果が「英語特講」以外の生徒にも、ひいては全国の高等学校一般にも、探究活動と英語のあり方について還元できるよう、模索を続けていきたい。

## 参考文献・引用文献

- 小俣岳 (2020) 経験学習としての「自己推薦文」執筆：英語科教員の海外大学進学支援のあり方に関する一考察. 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 57 : 73-78.
- 児馬修 (1996) ファンダメンタル英語史. ひつじ書房.
- 高見澤孟他 (2004) 新・はじめての日本語教育 1. アスク.
- 福島悦子・上原聡 (2004) 『「言いません」としか僕は言わないです：会話における丁寧体否定辞の二形式.』言語学と日本語教育Ⅲ所収. くろしお出版. pp.269-286.
- 光田怜太郎・小太刀知佐 (2019) 留学生授業の展開：授業での留学生による学習支援：東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 56 : 39-48.
- Labov, W. (1966) *The Social Stratification of English in New York City*. Washington DC : Center for Applied Linguistics.
- Purdue University (2019) *Full OWL Resources for Grades 7-12: Purdue Writing Lab*. Available at : [https://owl.purdue.edu/owl/teacher\\_and\\_tutor\\_resources/writing\\_instructors/grades\\_7\\_12\\_instructors\\_and\\_students/index.html](https://owl.purdue.edu/owl/teacher_and_tutor_resources/writing_instructors/grades_7_12_instructors_and_students/index.html) (Accessed: 30 November 2019) .

付録：本校探究活動のルーブリック

項目	グループ		1	2	3	4	5つの重点課題	備考 (評価のために)
	探究活動 コンピテンシ	具体的な育成項目						
1	立証する能力 理論的構築力	A 課題を発見する力 B スラスラする力 C 問題解決力	試行錯誤の中から、明らかにすべき課題を焦点化する。課題は抽象的なものである。	試行錯誤の中から、明らかにすべき課題を焦点化しようとする。課題には不明瞭な点が見られる。	試行錯誤の中から、明らかにすべき課題を十分に焦点化して設定することができる。	試行錯誤の中から、明らかにすべき課題を十分に焦点化して設定することができる。特に評価できる。	他者の発表に対して、自分の研究と無関係と決めつけ、自己の研究への取り組みが全くとみられない。	①文科系の探究では必ずしも「科学的」である必要はないが、「普遍的な論理」として、論理的・客観的な議論がなされていることは重要なことである。 Scientific, Universal Logic
2	科学的・普遍的な論理の構築	科学的・普遍的な論理の構築	他者の研究に興味をもち、また自己の研究に論理的な枠組みを構築しようとしている。	他者の研究に強い関心をもち、自己の研究にも参考になる点を取り入れつつ論理的な枠組みを構築しようとしている。	他者の研究について関心をもち、積極的に質問をしている。また、その過程を通してクリティカルシンキングを鍛え自己の研究にも活かしている。	他者の研究について積極的に質問をしている。また、その過程を通してクリティカルシンキングを鍛え自己の研究にも活かしている。	他者の発表に対して、自分の研究と無関係と決めつけ、自己の研究への取り組みが全くとみられない。	②「必然性」とは、その探究活動を行なおうとする理由である。それは社会的な要請だけでなく、強い個人的な好奇心などでもよい。 ③4は教員の指導がなくとも十分に生徒が課題を見つけることができる状態を指す。
3	粘り強く取り組む姿勢 (探究活動の必然性)	粘り強く取り組む姿勢 (探究活動の必然性)	探究課題に対して、粘り強く取り組むべき必然性を感じながら、粘り強く取り組むことができる。	探究課題に対して、粘り強く取り組むべき必然性を感じながら、粘り強く取り組むことができる。	探究課題に対して、粘り強く取り組むべき必然性を感じながら、粘り強く取り組むことができる。	探究課題に対して、粘り強く取り組むべき必然性を感じながら、粘り強く取り組むことができる。	探究課題に対して、粘り強く取り組むべき必然性を感じながら、粘り強く取り組むことができる。	④1にて、サイクルを1周したかどうかの判断は各グループに任せる。 ④4は教員の指導がなくとも十分に生徒が課題を見つけることができる状態を指す。
4	展望・計画	D 展望・計画	研究の流れを理解し、研究のサイクル(試行錯誤)の持つ重要性を理解しているが、サイクルを1周させることができない。	研究の流れを理解し、研究のサイクル(試行錯誤)を少なくとも1度回し、今後の課題を提案することができる。	研究の流れを理解し、研究のサイクル(試行錯誤)を少なくとも1度回し、今後の課題を提案することができる。	研究の流れを理解し、研究のサイクル(試行錯誤)を少なくとも1度回し、今後の課題を提案することができる。	研究の流れ・サイクル(試行錯誤)の持つ重要性を理解できず、全くサイクルを回すことができない。	⑤毎月の活動での発表活動も評価の対象である。 ⑥「発表に必要な要素を取捨選択する」ことは、少なくとも試行錯誤を重ねなければならぬ。 ⑦グループでの発表の場合、発表への貢献を個々に見定め、個人を評価することである。
5	発信する力	C 発信する力	日本語を交えながら英語を用いて発表ができる。	日本語を用いずに英語で一通り発表ができる。	英語で聞き手を意識して発表ができ、質疑応答にも答えることができる。	英語で聞き手を意識して発表ができ、質疑応答にも適切に答え、双方向のコミュニケーションがとることができる。	発表においてほとんど英語を使っている。	⑧4はExcelなどを用いた数量的な分析を含むこと。理科系は程度の高いものを目指す。 ⑨2の最低限とは、成果物の提出(論文やポスターなど)をICT設備を用いて完成させることである。
6	自分から主張する力 語学スキル 思考力 探究力 技術	C 発信する力 ICT活用能力	プレゼンテーションソフトやワープロソフト等を用いることができる。	プレゼンテーションソフトやワープロソフト等の成果をまとめることができる。	プレゼンテーションソフトを簡単に興味を持たせるよう活用し、ワープロソフトは論文の体裁をおおむね適切に守り文書を作成することができる。	プレゼンテーションソフトを簡単に興味を持たせるよう活用し、ワープロソフトは論文の体裁をおおむね適切に守り文書を作成することができる。	Power Point・Word・Excelなど必要なソフトを活用することができない。	⑩4はExcelなどを用いた数量的な分析を含むこと。理科系は程度の高いものを目指す。 ⑪2の最低限とは、成果物の提出(論文やポスターなど)をICT設備を用いて完成させることである。

※5つの重点課題 A: 課題を発見する力 B: 科学的なプロセスで問題解決する力 C: 発信する力 D: 展望・計画をもつ力 E: 関係を構築する力、協働する力